つまり、彼等は有志として蜂起し、擾亂を企てたゞけで、その背後に、少くともその成功を確信させるだけの實力を持たなかつたことである。自分たち同志だけで、先づ事を起せば、天下は自然に動いて、討幕が出來ると、簡單に考へてゐたことである。やせてもかれても、幕府はそんなに脆く崩壞しはしない。

この誤りを再びくり返さず、討幕の大理想を實現する方法は、たつた一つしかないのである。それは、もつと實力ある者が一致して、幕府に當ることである。バラ〳〵ではダメなのである。

つまり志を同じくする雄藩が、今までの種々の行きがかりを水に流して、この際大同團結し、同盟を結ぶことである。もつと簡單に云ふならば、薩藩と長藩の同盟である。

なるほど、今や薩長は仇敵の間柄と云つてよい。長州兵の精鋭は、蛤御門の戰で、薩摩軍の銃火にかゝつて、澤山死んでゐる。薩奸會賊と云ふのは、當時の志士の標語であつて、薩摩は會津と同じく、佐幕の張本人と目され、その評判のわるいこと甚しい。

薩藩はしかし、果して佐幕であらうか。斷じて否だ。たゞ長州や勤皇急進論者のやうに、過激でなかつたゞけだ。その耿々たる勤皇精神に於ては、一歩も讓るものではなかつたのである。目的は同じであるが、その手段に於て、異つてゐたゞけなのである。それから封建の世だ

けに、藩と藩との間の對立嫉視もある。彼等は一藩を以て一國とし、互ひに對峙してゐたのである。

しかし、大體のコースとして、薩摩と長州とは、それ程深刻に憎み合はなければならぬ理由はないのだ。西國の雄鎭として、共に率先して勤皇の大義を唱へた兩藩の先覺者の間に、それほど深刻な敵愾心があるとは思へない。話せば分るのである。

こゝ四五年の間の不幸な行きがゝりを捨てゝしまへば、兩藩の妥協は可能だし、提携も出來る。

たゞ、薩摩でも長州でも、かう氣づいてゐたが、責任ある當局者は、自分で先に言ひ出すわけにはゆかないのだ。

この時、兩藩の間に橋渡しをして、その提携の糸口を開いてやつたのが、土佐勤皇黨の俊英、坂本龍馬と中岡愼太郎であつた。

慶應元年五月六日、馬關へ長藩の巨頭、桂小五郎（木戸孝允）を引つぱり出し、薩摩藩の代表、西鄕隆盛の來るのを待ちながら、龍馬はさかんに桂を煙に捲いてゐるのである。

「桂さん、わたしは此のごろ、主に西洋の本を讀んでゐます。西洋ではね、國民をどうして食はすかと云ふことが政治の根本なのです。ところで日本はどうだ。日本の政治家で、國民の

臺所に立寄つて、彼等が一體何を食つてゐるか、何を着てゐるか、どんな暮しをしてゐるか、行燈の蔭の晩めしまでのぞいた者がありますか。この一事だけで、幕府の制度は倒さなければいけませんよ」

龍馬は一種の天才といつてよい。現存する彼の寫眞を見る者は、必らず彼の眼のたゞならぬのに氣がつくであらう。少し眼れぼつたいから、恐らく近眼だらうが、その眸にやどる、遠く望み、深く思ふが如き一抹憂愁の氣は、たしかに常人のそれではない。

彼がどこまで横文字を讀めたか、恐らく大したことはなからうが、その鋭い天才的なカンは、いつの間にか西洋の代議政治の實體といふものを掴み、封建政治の次に來るものは、必らずこの新らしい政治であることを信じてゐた。

漢譯された、西洋の代議政治の書物は讀んでゐたらう。またハイカラな同藩の志士たちの間に交される、立憲政治論のうちに立ち交つて、その本質をつかみ、明日の目標をそこにハッキリと置いてゐたところに、その先覺者としての偉さがある。

だから、薩長が互ひに肚の探り合ひをして、なか〳〵木戸、西郷の會見がまとまらないと、彼はかう云つて怒鳴つてゐるのだ。

「何がわが藩の面目、體面、名譽だ。もういゝ加減にしないか。あんた等は、まだ封建制度の

幽靈を背負つてゐるのか。此の大きな日本を何故忘れてゐる。同じ日本の土地の上に、位牌知行を立て合ひ、わが藩、わが主人と、區別を立てゝ何になる。西郷も桂も、これ程大馬鹿とは思つてゐなかつたよ」

さう言つて、西郷に直談判をして、この薩長秘密攻守同盟を締結させたのである。慶應二年一月二十一日のことである。

しかも此の祕密同盟は、七十七萬石と三十六萬石の大藩が、漫然と一緒になつたのではない。この兩雄藩を代表するに足る、西郷と木戸が、腹心を披瀝しあつて、討幕の役割を分擔することを決めたのだ。

木戸は貧乏醫者の子で、武家へ養子に行つて、初めて侍となれた男だ。西郷もまた貧乏武士の出で、一枚の蒲團に、兄弟してくるまり、芋や雜穀を食ひながら成長した人物である。共に輕格武士として、悉ゆる辛酸をなめて出來上つた革新派だ。

しかも彼等の後には、氣鋭の下級武士を先頭に、渾然とまとまつた、實行力ある大藩、薩摩長州の威容が、儼として聳へてゐるのである。その他に、土佐藩、越前藩、宇和島藩等の各藩も、これを機に一つに固まらうとしてゐる。

この點、坂本龍馬を仲介とする、西郷吉之助、桂小五郎兩人の晴れやかな握手は、正に維新

回天の新しい出發點といつてよい。皇政復古運動の進展は、こゝに一段と拍車をかけられるのである。

維新史を流れる國體觀念

慶應三年十二月九日、明治天皇小御所に御出御、諸卿諸侯を召見し賜ひて、皇政復古のことを諭告し賜ふた。こゝに於て、明治維新のことは、一まづ形の上では成つたのである。

この復古の大號令に先立つこと二ヶ月、德川慶喜は土佐の後藤象二郎、坂本龍馬の建白により、十月十四日に、政權奉還の表を奉つてゐる。

薩長の攻勢はいよ／＼激しく、このまゝでは幕府の瓦解免れ難しと見てとり、慶喜將軍は土佐派の公武合體、公議政治論を採つて、大政奉還と先手に出たのである。これでは如何に幕府打倒といきり立つてゐる薩長と雖も文句がつけられないのである。

しかし、薩長派の西鄕、大久保、木戸たちは、たゞに大政奉還だけでは、ダメだと達觀した。二百有餘年の舊習に汚染した人心を振起するためにも、幕府にはどうしても武力を以て一擊を加へ、天下の人心を一新しなければ、新時代は來ないと見てとつたのだ。

板垣退助などは、「馬上でとつた德川の天下だから、馬上でなければ奪れぬ」と痛言してゐる

程である。

そして彼等は、さま〻の挑戰的行動をとつて、幕府側を怒らせようとした。江戸薩摩邸の放火などそれだ。こゝに於て、衰へたりと雖も、幕府は依然として幕府だ。大阪に退いて謹愼してゐる慶喜をめぐつて、幕臣の激昂は渦をまき、伏見鳥羽の一戰となつて爆發、こゝに一ヶ年餘に亘る戊辰戰爭の幕は切つて落されたわけである。

この薩長主戰派のやり方は、充分に理由はあつたけれど、しかし考へてみれば、ずゐ分危險な權道だつたとも云へよう。

若し慶喜が本當に肚を据ゑて、佐幕派の各藩士を集めて、反薩長の旗幟を掲げて起つたならばどうであらうか。

當時フランスは、ナポレオン三世の命を承けた公使ロセスが、積極的に幕府援助に乘り出してゐるのである。金も六百萬弗貸さう。軍事顧問も派遣すると言つたハリ切り方である。

だから慶喜が、突如として大政奉還の擧に出ると、公使ロセスはすつかり呆れ、また驚いてしまつた。

「三百年も天下の太平を齎した德川家が、兵戈も交へずして、こんなに簡單に政權をなげ出すとは、不思議千萬である。歐羅巴には、こんなバカ／＼しい政變は嘗てない」

と、福澤諭吉に語つたといふ。

まことに、西歐人の頭から考へれば、凡そこれほど不思議な政權の移動はないだらう。ロセスは悧口な男だつたので、朝廷と幕府の歴史的な區別は一應知識としては承知してゐたのだが、この大政奉還にはすつかり面喰つたらしいのである。日本の國體觀念だけは、本當には理解出來なかつたのである。

それにしても、フランスの幕府援助は、相當に本腰を入れたものだつたのである。

慶喜が心ならずも官軍と、伏見鳥羽で一戰を交へ、慘澹たる敗戰を喫して、海路江戸に着くや、ロセスは直ちに江戸城に三回ものり込んで會見し、大いに天下の大勢を論じ、激勵に努め、その再起をすゝめたのである。裝甲板のある軍艦も貸さう、新式の大砲をも貸さういふのであつた。

時は時だし、渡りに舟と慶喜はとびついてくるかと思ひの外、ロセスはまた茲でも「國體」といふ、どうしても合點のゆかぬ言葉にぶつかつてゐる。

「公使の御厚意は有難いが、日本の國體は他國と違つてゐる。たとへどんな事情があつても、一天萬乘の君に向つて弓を引くことは出來ない。予の代になつて、祖先の大業を失ふのは申譯けないが、たとへ死んでも、朝廷に對しては弓を引けない」

かう言つて、慶喜はフランスの援助を拒絶してゐる。この氣持ちで、彼はまた、血氣に逸る旗本の將士を慰撫し、あくまでも絶對無抵抗主義をとつて、四月二十一日には、本據江戸城をも官軍に引渡し、鄕國水戸に退いて、弘道館の一室に退隱してゐるのである。

慶喜は烈公齊昭の子で、水戸學の精神で、幼時から育て上げられてきた人だ。皇政復古は皇國本來の姿で、これは歴史の必然だと觀じてゐたのだ。薩長の專恣は、固より好むところではなかつたが、わが皇室が中心となつて、これからの日本は世界に乘り出してゆかねばならぬと信じてゐたことは、決して勤皇の有志と違ふものではなかつた。たゞ將軍といふ立場が、今まで、歴史を逆行させる役目を擔はせてゐたのである。水戸に退いて、はじめて、慶喜は一日本人としての自分と、そしてその立場を得て、靜かに時勢を眺め得るにいたつたといへよう。

攻められる慶喜に此の感懷があつたとすれば、攻める薩長側にも、稱揚されるべき佳行があつた。

フランスが幕府に力を貸したのと同じやり方で、英國の薩長援助は公然の祕密であつた。英國公使パークスは、機會ある毎に、薩摩に說いて、幕府及びその背後にあるフランスを打倒すべくすゝめ、その爲にはどんな援助でもするからと、もちかけてゐる。

これに對して、薩長の領袖、西鄕吉之助は何と答へてゐるか。

「戰爭のことはとに角、日本の政體變革のことは、われ〳〵日本人だけで考へるべき問題である。外國の援助を受けるは面目ない」

と、キツパリと斷つてゐるのである。

イギリスといひ、フランスといひ、內亂を利用して、その國の內に喰ひこみ、うまい汁を吸ふのは、常套手段だといつてよい。英は薩長に、佛は幕府に、この世界の二大帝國は、南米に阿弗利加に植民地を繞つて對立したやうに、日本をその植民帝國の一環に結びつけんとして、火の出るやうな烈しさで、睨み合つてゐるのだ。期するところは、利益だ。その意味で、當時一歩を誤らんか、日本はやがて印度となり、埃及となるかも知れぬ危險は充分にあつたのだ。實に維新史上の重大危機と云つてよい。

しかし幸ひに、慶喜といひ、西鄕といひ、わが國體といふ點にいたつて、その兩極端の立場にも不拘、期せずして一致してゐたわけである。外國をある程度まで利用しようとは考へたであらうが、その國政干涉は一歩たりとも許さなかつたし、近づけもしなかつた。そこに維新史を流れる、日本人獨特の力强い信念の流れを見るのである。以夷制夷など、所詮、日本人には出來ない藝當なのであらう。

あれほどに激湍渦を捲いた、維新の政治史に於て、われ〳〵は此の日本歷史に特有な美談佳

話を探さうとするならば、他にもいくつも擧げられるだらう。

伏見鳥羽の戰爭がまさに一觸卽發といふ時、大阪城に在る慶喜のもとへ、岩倉卿から一使者が遣はされた。孝明天皇御一年忌に際し、慶喜に對して献金のことを申出でたのである。恐懼した慶喜は、直ちに勘定奉行に命じて、直ちに五萬兩を朝廷に奉つてゐるのである。想へ、京都は今や薩長の精兵によつて充滿し、幕兵一掃といきり立つてゐる時である。大阪城は、江戸から上つた竹中陸軍奉行の大軍によつて守られ、京都に對して、一戰に及ばんと、陣容を整へてゐる最中である。これらの物々しい空氣の中にあつて、大阪城と京都御所を結んで、一脈淸冽の氣の相連つてゐるのを見る、われ〳〵日本人は如何に幸福者であらうか。

明治元年、東京奠都に當つて、鳳輦は肅々と東海道を下られ、駿河國にさしかゝつた。駿河は德川家の本據で、その舊臣たちの中に、どんな不心得者が居ないとも限らない。それを憂へて供奉の公卿の中には、四日市から海路、輦輿をお渡ししようと言ひ出したものがあつた。

この時、木戸孝允はその議を排して、

「皇政維新の今日、信を敵の腹中に置かなくて、どうして天下の人心を收攬することが出來るか」

と云ひ、わざ〳〵使者を駿府の德川家にたてた。當時慶喜は隱居して、嗣子龜之助（今の家達

公）が駿府で七十萬石に削封されて、ほそ〴〵とやつてゐた時である。

「今度鳳輦が駿河遠江を御通過になるが、途中の御警衛は徳川家任ずべし。間違ひないように」

と、述べる使者の言葉を聞いて、閣老以下幕臣たちは、上下相抱いて號泣し、死生を睹して、天子様をお護り致さうと誓ふのであつた。爲に、大井川、富士川の警衛は非常にうまく行屆いたと言ふが、日本の歴史にして初めて起り得る佳話だと、感激に堪へない。

伏見鳥羽の一戰に朝敵の汚名を着た、徳川慶喜に對する處斷は、當時諸説紛々で、初めの中は死刑論が壓倒的に多かつた。薩長の諸將は慶喜を憎むこと甚しく、ぜひこれを誅戮して、刑典を正さねばならぬと主張する者が多かつたのである。

この時に於て、明治天皇は三條實美を召されて、徳川家の舊勲を失はざるやうに處置せよ、との有難き宸翰を賜つてゐる。

この「舊勲を失はざるやうに」の御宸翰は、全く、御年少の、明治天皇の大御心から發せられたことで、全く三條、岩倉等何人の奏請でもなかつた相である。また此の御宸翰は、近頃三條公爵家に於て見出されたもので、徳川家達公は、この御宸翰をはじめて拜見した時には泪を流し、

「今少し早く發見されて、慶喜が拜見したならば、定めし感涙に咽んだことであらう」

と言つて、歡んだといふ。

これらの聖恩が、たゞに徳川氏をしてその家祀を全うせしめたばかりでなく、明治維新の大業をして容易に成就せしめた所以なのである。

戊辰奥羽諸藩の處斷に於ても、詔して今日の亂は九百年來の弊習の結果であると、大いに藩主等の罪を恕し、今後親しく教化を國内に布き、徳威を海外に輝かさんことを欲する旨を、告げたまうた。恐懼の限りである。

この洪大無邊の聖恩があつたればこそ、維新の戰亂も容易に鎮定されたのである。慶喜、西郷などの立派な國體觀などもさることながら、一たび、明治天皇の御洪大なる大御心に思ひ及ぶ時、明治維新史の花を觀る心持がするのである。

明治新政府の確立へ

廢藩置縣まで

明治二年、函館の幕軍が降伏して、明治維新史上の戰爭騷ぎは、一段落したが、果してこれで新時代の日本は本當に立ち直つたといへるだらうか。

一見、皇政は復古し、五ヶ條の御誓文は發布されて、萬機公論に決するといふ國是も確定されたが、實際に於て行はれた政治は、決して看板どほりの清新なものでもないし、立派なものではなかつた。

却つて、明治四年、廢藩置縣が斷行されるまで、新興日本は非常なピンチの中にあつたのだ。一歩あやまれば、建武中興の二の舞が演ぜられたかも知れない。

何となれば、當時の中央政府には、何の實力もないのだ。中心勢力がないのだ。然るに國內の各地には、みな昔通りの藩が對立割據し、その兵力を貯へて、中央に向つて、何等かの發言

をしようと構へてゐるのである。奥羽、北海道の戰爭から凱旋した各藩の將兵たちは、みなその武功を誇り合ひ、大小各藩みな獨立狀態で、中央進出をねらひ、來るべき變を待つ、といつた有樣である。いつ、第二の尊氏がとび出すかも分らないやうな形成だ。

この形勢を、第一に着目したのは、大久保甲東であつた。彼が明治二年四月二十六日、岩倉具視にやつた手紙の中に、彼の時局觀が現れてゐる。

「卽今、內外の大難、危急存亡の秋切迫すること間髮を容れず、抑も昨年來一時の平和の形をなすと雖も、大小藩主各〻孤疑を抱き、天下人心恟々然としてその亂れること百萬の兵戈動くより恐るべく、今日を平和と思ふは、床下の烈火の燃え出さゞること幸とするに異らず……」

といつてゐる。

この時局觀から出發した、彼の對策はどんなものか。それは公議政治を撤廢して、薩長二藩の實力を中心として、これを廟堂に集めて、政治の樞軸とし、思ひ切つた新政策をドシ〳〵實行し、中央政治の實を中外に明かにしなくてはならぬ、といふのである。

(薩長横暴と云はば云へ。今日に於て、薩長の實力によらずして、何が出來るか。幕府を倒した武力は、薩長の武力ではないか)。

かう心に固く決心した大久保は、まづ鹿兒島に引つこんでゐる西鄕を中央に呼び、岩倉、木

戸の智囊を一所に集めて、强力なる中央政府樹立にのり出したのである。

薩長をまとめるには、誰が何といつても、西郷が中心にならなければ、收らないのだ。殊に武士階級の間に於ける、西郷といふ者の人氣と信頼は絶對と云つてよい。

廢刀令や徵兵令、または廢藩置縣などの革新政策の氣運は、なによりも士族たちを極度の不安に陷れてゐる。それは、維新後に頻發した各地の暴動や、顯官の暗殺などを見ても分る。大村益次郎、參議廣澤眞臣などの暗殺は、みなこの暗鬱な空氣の現れである。

この士族の反抗を鎭撫するためには、どうしても西郷が中央に必要となつてくる。西郷が、たゞ坐つてゐるだけで、政府の信用は、重くなつてくるのである。

明治四年一月、西郷は大久保と一諸に鹿兒島を發つて、途中長州や土佐へ寄つて、大いに新政策を語り、二月に東京に入つた。

そして、まづ出來上つたのが、朝廷の親兵設置である。近衞兵を置くことである。今まで兵力がなかつた朝廷に御親兵を置き、この中央政府の實力を固めて、封建的な地方勢力を抑へて行かうといふのである。

同時に、新たに鎭臺制度が布かれて、小倉と石卷にその最初のものが置かれ、着々と次に來るものへの準備を築き上げて行つたのである。

次に來るものとは、――それこそ本當の意味に於ける維新政策、卽ち廢藩置縣の斷行である。有無を言はせず封建的な藩といふものをつぶし、中央政府の威令を全國に布くといふ、未曾有の大改革である。

政府には確固たる薩長の實力が、がん張つてゐる。御親兵はある。鎭臺は備へてある。

そして、その間に、西郷、大久保、木戸、岩倉らの巨頭間の慌しい往來があつて、七月十七日、全く疾風の如く廢藩令が下つたのである。

その時の日本中の驚きやうは、鳥尾小彌太が書いてゐるやうに、

「突然、廢藩令の下るや、全く他の意表に出で、恰も陰雲漠々、將に雨ふらんとする前、忽ち雷霆の下擊せし如く、人々相顧みて、一言半句もなく顏を見合せて、相共に令に應ぜしに似たり」

全く、呆然として、政府の果斷に愕いたのであらう。かうして藩の代りに、日本中に七十二縣が出來上つた。

武士にとつて、生活の本城ともいふべき、藩を一擧にして廢止したのであるから、そのショックも尋常ならざるものがあつたらう。武士の立場を知り、保守的だつた西郷は、自らこの廢藩令の當事者であつたが、その苦衷を述べ、

「お互ひに數百年來の御鴻恩、私情に於ては忍び難きことに候へども、天下の大勢かくの如く、全く人力の及ばざるところと存じ候」

と述懐してゐるのである。

しかし、眞に維新の實を擧ぐるためには、この廢藩置縣はどうしてものり越えて前進せねばならぬ段階なのである。好むと好まざるに不拘、中央集權政治は、こんな封建的遺物を殘存させてをくわけにはゆかぬのである。

そこに、西郷としての深い惱みがあつたのであらう。

西郷が眞に時勢の先頭に立つたのは、この廢藩置縣の年までゞある。陸軍大將になり、名聲天下を掩ふても、これからの西郷は、どうしても時勢から落伍しがちである。あくまでも侍びいきであり、保守的な西郷は、もうこれ以上の、革新政策には、堪へきれないのだ。

武士から刀を奪ひ上げる。そんなことを、どうして西郷が見てゐられるであらうか。また百姓から兵隊をとる。それは西郷にはどうしても合點がゆかないのである。

城山で戰死する時でも、

「百姓上りの官兵は可愛想だから、捕へても免してやれよ」

と云つてゐる位である。兵隊はどうしても武士でなければならぬと、固く信じてゐたのである。

る。

こゝに、西郷が武士階級に人氣があると同時に、大久保や岩倉と根本的に相容れない一線が引かれるのである。

大久保利通と富國强兵

西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、この維新元勳のトリオは、今日では常識となつてゐる。わが歷史の中で、このトリオと同じ位有名なのは、天下統一の英雄としての、信長、秀吉、家康のトリオくらゐであらう。

維新三元勳の功績は、この對比によつても分るほど有名で、この三傑を語らずに、明治維新を語ることは出來ないのである。

そして、この三傑に關する今迄の定評は、西郷は德望と軍事的能力で優れ、大久保は政治家としての手腕と實行力に勝れ、木戸は識見と理想とに於て、拔んでてゐたといはれる。

大久保が本當にその力量を發揮したのは、明治新政府に於てゞあつて、この點、維新前の大久保を觀察してみると、生れ更つたほど生彩を帶びてゐるのが目につく。維新の三傑の中で、一番進歩的だし、淸新でもある。

殊に、廢藩置縣以後、大久保は大藏卿として、事實上、明治新政府の最も力强い推進力となつてゐる。當時の大藏省は、現在の內務、大藏、遞信、農林、商工の五省を兼ねた尨大なる權限を持ち、最も大切な位置なのである。

大久保は自ら此の位置を占め、三條や西鄕を一種のロボットとして正面に立て、その麾下に井上馨、伊藤博文、松方正義、津田出などの新人を起用し、その志すところに邁進したのである。

それでは、大久保の目指すところは何であつたか。換言すれば、新興日本の新らしい目標は何であつたらうか。

言ふまでもなく、世界の資本主義國に、三百年も立遲れた日本を、この新らしい世界の軌道にのせて、出發させることなのである。中央集權の新政府を固め、國內の殖產興業に努め、終極は富國强兵、東亞に於ける日本の地位を確立することなのである。

明治四年十一月、大久保は大藏卿在職のまゝ、副使として岩倉全權大使の一行と共に、歐米巡遊の途に上つた。

衆知のやうに、この視察團が日本へ齎した意義は、まことに重大であるが、中でも、大久保は極めて熱心に、工場、銀行、農場などの新施設を勉强してゐる。

彼は、イギリスの產業に深い感銘を受け、西鄕などへの手紙には、その感歎の心持を餘すところなく傳へてゐる。

大久保は、英國に滯在中、感歎と共に、殆んど絕望的な感想さへ同行の者に洩らしてゐるのである。

「かうして西洋を歩いてみると、われ〳〵のやうに年をとつた者は、もう時勢に應じきれんやうな氣がする。われ〳〵は、こんな進歩の世には適さんよ」

と語つたと傳へられる。

當時の政治家の中で、最も進歩的であり、最も强氣でもあつた、大久保のこの「もうわれわれは時勢に應じ切れぬ」の嘆聲こそ、眞に後進國日本の苦惱を代表するものと言へないだらうか。

しかし、大久保は、決して絕望してばかりゐたのではない。どうしても、日本を、歐米先進國の狀態まで引き上げなければならぬと、本當に決意したのであつた。

彼はパリーに滯在中、大倉喜八郎と相談して、わが國にも大いに牧羊、製絨業を起さうと計畫してゐる。また養蠶製絲なども、專門家に命じて、その改良調査に從事させてゐる。

かうした意氣込みで、歸朝した大久保を待ちかまへてゐたのは、征韓論の崩議紛糾であつ

た。(この國内改造の大問題をよそに、征韓とは何事か、日本は何を措いても、まづ殖産興業、富國强兵の大策を樹立しなければならぬ)この大久保の確信の前には、莫逆の友、西郷も一箇の時代遲れの保守主義者としか、或は時代知らずの過激論者としか映じなかつたのだらう。

とにかく、この征韓論は、當時廟堂の士の思想を、ハッキリと區別してゐる點で興味がある。征韓派の參議が、西郷、板垣退助、副島種臣、江藤新平、後藤象二郎の五人。みなどことなしに共通な性格なり、考へ方を持つてゐるのが分らう。これに對して、非征韓派は、岩倉右大臣、三條太政大臣、大久保利通、木戸孝允、大隈重信、大木喬任の六人。

そして、遂に多數決と、岩倉、大久保の頑張りによつて、文治派の勝利に歸し、武斷派たる征韓論者は續々と朝廷を退いて、國許に歸つてしまつた。明治新政府の最大の危機は、かうして蘊醸されていつたのである。

この決裂を機として、大久保は斷然別人の面影を備へてきた。どちらかと云へば、妥協的だつた彼も、征韓論以後は、眼中既に薩摩も長州もない。西郷は勿論、木戸の嚮背さへ、全く問題にしてゐないのである。

大隈が、この時の大久保を批評して、

「大久保さんが、沈思默考して、よいと確信したら、猛然進んでは〻からなかつた。この時、

大久保さんの前に立ち塞るものは、一人もなかつた」

と、言つてゐる。

大久保にすれば、征韓論排擊、文治政策遂行のためには、西郷や江藤が兵を擧げるのは覺悟の上だつたのである。内亂の一つや二つは豫期してゐた。明治維新の業を本當に完成し、西歐先進文明を採り入れて、舊き日本を改造するといふ大業を成就するためには、それくらゐの犧牲は仕方がないと考へたのである。

西郷や桐野らが歸國すると聞きながら、彼は伊藤に書を與へて、その決心を打明けてゐる。

「この際、うろ〳〵してゐては、實に天下の物笑ひ、廟堂の政治も確定し、政府の基礎を相據ゑ候までは一歩も讓らざる決心に候」

冷嚴にして、あくまでも前途を見据ゑてゐる、その不敵の眼光は、何ものをも踏みつけてやまざる慨がある。

明治六年の征韓論の決裂は、廟議の決裂であると同時に、國内の保守不平分子の擡頭を意味し、それは容易ならざる國内相尅のすがたを豫言するものであつた。果せるかな、西洋文明の輸入を嫌つた保守主義者、攘夷の流を酌む國權論者、武士階級の撤廢から生活難に惱む士族たち、薩長專制に反感をもつ閥外の不平政治家たちは、一齊に起つて、東北や西南の天地に、動

亂を企てるにいたつた。

薩長土の近衞兵たちは、どんゞ〳〵歸國してしまふ。鹿兒島にある政府の兵營は燒き拂はれる。翌七年には、右大臣岩倉具視が赤坂喰違で要擊される。板垣、副島、後藤など征韓派の前參議は、民選議院設立の建白書を奉り、大久保達藩閥の獨裁といふべき政府を、誹謗して剩すところがなかつた。

板垣は土佐に歸つて、自由民權を唱へて、立志社を建て、佐賀には征韓黨が出來て、江藤がその首領となる。萩には前原一誠の一派あり、熊本には神風連蟠居し、そして鹿兒島には、西鄕を中心として、鬱然たる西鄕王國が中央政府に對して、反抗的氣勢を上げてゐる。廢藩置縣前後を、明治政府の第一の危機とすれば、この時は第二の危機であり、同時に最大の危機だつたのである。

明治七年、佐賀の江藤新平の亂の勃發は、正にその導火線に火を點じたものであつた。大久保らの眼には、天下大動亂の烽火と、見えたのであつた。

大久保たちはこの亂を非常に重大に考へ、これを徹底的に征討して、政府の實力を示さねばならぬと考へた。軍事にあまり長じてゐないのにも拘らず、大久保は、內務卿として兵を進めてゐるのをみても、その意氣込みが察せられよう。

「佐賀の賊徒ども、實にいま〳〵しき奴ら、かくの如きものには、些か目にもの見せずば、人民の安堵を妨げ申し候。少々無理にても、吐劑か、瀉劑を用ひんと愚考いたし申候」

と、伊藤博文への手紙に書いてゐる。

この亂後、首謀江藤新平は死刑になつてゐるが、往年の同僚を殺して平然たるものがあると、大久保らの處置を批難するものが多いが、大久保たちにすれば、これは全國の不平分子に對する斷乎たる見せしめだつたのである。

四月、佐賀の亂が治ると、今度は臺灣の征討に從事して、つゞいて清國に出かけて行つて李鴻章と談判して、臺灣征討が日本の義戰であることを承認させ、且つ莫大なる償金をせしめて、意氣揚々として引き上げてくる。これらの場合には、いつも自分が最先きに立つて、積極的に責任を負つて當つてゐることは注目すべきで、實に一身を以て天下の重きに任じてゐたのである。

つゞいて、明治九年には、熊本の神風連の亂を平げ、萩の前原一誠を討ち、十年には遂に西南戰爭に對して徹底的に戰ひぬいて、これに勝ち、こゝに於て初めて明治政府の確立を完成したのである。もはや何人と雖も、武力を以てして、この明治新政府を動かすことは出來ないのである。政府の內部的な制度上の枝葉は問はず、この內亂終塞を以て明治統一政府の完成とみ

て、まづ誤りはないと思ふ。新興日本の基礎は、こゝに於て確立したのである。後年、立憲政治が行はれるやうになつたのも、この安定した國情の上に築かれたからである。

この安定勢力の中心に立つてゐるのは、大久保である。その油ののり切つた手腕は、内亂撲滅の方面ばかりでなく、その必死の信念とも云ふべき、殖産興業の方面にも、遺憾なく振はれたのである。

日本の産業、殊に明治時代の産業で、大久保が手をかけないものは、殆んどないと云つても過言ではなからう。三里塚御料牧場や、駒場の農大、日本紡績業の創始である群馬縣新町の屑絲製造所など、みな彼が直接指導した事業である。鐵道、汽船、郵便、電信の設置、大學校、地租税法の改正、徴兵令の發布、刑法の改正など、勸業の方法と文明の設備に於て、悉さぬことはない。

明治十四年五月十四日、霞關の私邸を訪問した福島縣令に對して、大久保は詢々と政府の殖産興業、文明政策を説いてゐる。

「皇政復古の目的を達成するのには、三十年の日子を要する。第一期の十年は創業時代、十一年よりの第二期は、内治を整へ、國力の充實をはかるにある。そして今や、この第二期の出發點である。身不肖なれども、百難を排してこれが遂行を期する覺悟である。」

これが、彼の遺言となつたわけである。その日の午前九時、石川縣士族、島田一郎以下五名の刺客の手に仆れてゐるのである。

その斬奸狀に

「公議を杜絶し、民權を抑壓し、以て政治を私する罪、その一なり」

と、第一に彼のフアツショ的な政治に對して、反對を述べてゐる。

大久保の政治に對する欠陷を衝いてゐると思ふ。あまりにも自信が強すぎ、反對者を閉息させすぎたのである。その爆發が、かゝる暗殺となつてあらはれたのである。

（手ぬかりはなし、盡すだけのことは充分に盡してゐる。しかし、有難いとは思はれない）といふ行爲はよくあるものだが、大久保の强力な文明政策は、これとよく似てゐると思ふ。尤も、それくらゐ壓倒的であり、强引でなければ、多難なる明治初期の政界は乘り切れぬ、とも言へよう。

大久保は、かうして不本意の中に、死んでゐる。しかし、彼が遺した事業は、優秀な後繼者たちが澤山集つて、立派に繼承してゐるのである。伊藤博文、大隈重信、山縣有明、松方正義など。

殖産興業によつて、後進國日本を歐米先進國の文明のレベルまで高めるといふ大仕事は、大

久保の指示した方向に向つて、進められて行つたのである。資本主義を採り入れ、その物質の力による、富國强兵、これこそ明治日本の進路といつてよい。このコースを外しては、あの日清、日露の戰勝は、考へられないのである。

立憲政治

自由黨と改進黨

明治七年一月、前參議板垣退助たちによる民選議院設置の建白は、國民參政權運動の口火であつた。この運動は、歐米の自由民權思想に基いたものであつて、目標は明治維新の公議政治の復活にあつた。

維新當初は、五箇條御誓文のことあり、また土佐派の民權思想が盛んで、中央政府には、各藩選出の徵士、貢士が集つて、今日の代議士のやうに、國政に關つてゐた。ところが、當時はまだ此の公議政治がよく理解されず、徵士貢士も勝手なことばかりに熱を上げ、議論倒れで、政治の運行は圓滑に進まなかつた。

これではダメだと見てとつて、積極的に乘り出して來たのが、薩長の藩閥政治家で、この公議的政治を廢止し、中心的な實力ある藩閥政府をつくり上げたもので、大久保利通の强力政治

はその好例であつた。

しかし公議政治は一應こゝに片づけられてしまつたが、一度でも此の甘味を味つた國民は、どうしても、その清新で進歩的な趣が忘れられなかつた。殊に、眼前には、人も無げに振舞ふ藩閥政治家の專斷を見るにつけ、どうしても彼等と對抗してゆくには、公議政治、自由民權政治を確立しなくてはならぬ、と感じるやうになつた。この風潮に對して、更に油を注いだのは、藩閥から、除けものにされた失意の政客たちであつて、彼等も此の自由民權の思想を煽ることによつて、自分たちの政治的な地位を築いてゆかうと計つたのである。

これらの政客の中で、最も有力だつたのは、土佐の板垣退助であつて、彼は征韓論で破れて、參議の顯職を捨てるや、すぐに鄕國土佐へ引揚げて、片岡健吉などの同志を糾合して、立志社をつくり盛んに自由民權を呼號した。

立志社は、明治十三年三月に、國會開設期成同盟會と改稱して、さかんに活動し、その國會開設の願望書には、署名者九萬八千餘人を集め、大いに氣勢を擧げた。しかも此の擧が傳はると、天下の人心は翕然として集まり、そのまゝでは捨てゝ置かれぬ廟堂の大問題となつたのである。

明治十二年末、明治天皇は、立憲政治に就て、山縣有明、黑田清隆、山田顯義、伊藤博文、

大隈重信等の各參議の意見を求められることになつた。

各參議の意見書は提出されたが、こゝに大隈參議の意見書の內容によつて、はしなくも大紛擾が捲き起つた。それは、大隈の意見が、とび離れて急進的であつて、明治十五年には憲法を發布し、十六年に國會を開くべしといふ、當時の薩長政治家の常識としては、凡そ考へ得られぬくらゐ進歩的なものである。

「大隈は多年の同志に謀らず、自分一人がよい兒にならうとして、あんな突飛な意見を上つたのだ。民間の民權論者に、獨り媚びて、あんな大芝居を打つたのだ」

と云ふので、大隈は薩長藩閥政治家から總排斥をくひ、明治十四年、廟堂から追はれてゐるのである。

この間にあつて、伊藤博文は、民心の立憲政治要望に嚮ふのを見て、國會開設の止むを得ざることを、岩倉右大臣に勸奬してゐる。

そこで、十四年十月十二日、政府は明治二十三年を以て、國會開設の期を決め、これに就て、畏れ多くも勅諭が下しおかれてゐる。

とにかく、藩閥政府が、人心の動向を察して、こゝに一先づ妥協に出て、明治廿三年を期して國會を開設すると公表したのであるから、民間側の民權論者は、こゝに一應の目標を得て、

いよ〳〵活潑にその運動を展開したのであつた。その第一の段階は、政黨の結成である。

自由黨は、明治十四年十月、結黨式を擧げた。その中心は、土佐立志社であつて、その黨首は云ふまでもなく、板垣退助である。大井憲太郎、河野廣中、松田正久などの、錚々たる闘士を擁した。

自由黨結黨より一年遲れて、改進黨が翌年結黨式をあげてゐる。これは、前年政府を逐はれた大隈一派が主流であつて、黨首は大隈重信、黨員には、天野文雄、小野梓など、當時の知識人の精粹をあつめてゐる。

勿論、この二大政黨は、國會開設に備へて結成されたものだが、その主なる目的は、立憲政治の確立、即ち藩閥政府の打倒にあつたことは云ふまでもない。

こゝに注意すべきは、自由黨は土佐出身の前參議板垣退助、改進黨は肥前出身の前參議大隈重信によつて組織されたことで、兩黨とも、板垣なり大隈なりの性格や考へ方に強く影響されてゐることである。

板垣も大隈も、薩長からみれば閥外で、そのために、廟堂から追はれたのであるが、そのため兩人とも、新勢力と結合して、薩長に對抗しようとする色彩が強いのである。

勿論、立憲主義に對する國民的要求といふものが背景になつてはゐるが、わが國の憲政が、

かうした政治闘爭を主目的とした政治家によつて作られたことを考へれば、どうしても日本の政黨が、主義を主とせずして、やゝもすれば封建的な政治權力爭ひの形になり易かつたことも、豫想出來るわけである。

自由黨も改進黨も、共に立憲主義を奉じ、藩閥を共同の敵としたのであるから、兩黨は相互に提携して進むべきであるのに、實際はこれに反して、常に軋轢、闘爭を事としたのは、その主義の違ひと云ふより、兩黨首の性格や氣風に左右されたところが多い。

意氣を尙んだ情熱家の板垣の下には、どうしても、燕趙悲歌の士が多い。地方農民や、舊藩士族階級の黨員が、自からその膝下に集つたのは當然であらう。

智略に長じ、品格を重んずる大隈の下には、學問あるインテリや論客が多く、都市商工業者が澤山にゐた。

今日の政友會は、自由黨の後身であるし、民政黨は改進黨の後身だが、兩黨の黨風、黨員氣質など、今尙舊套依然として六十年前と大差ないではないか。

憲法發布と伊藤博文

明治十二年の夏、アメリカ前大統領グラント將軍は世界漫遊の途中、日本に立寄つた。日本で

は前大統領のことであるから、皇室の御殊遇、政府の接待は、非常に慇懃を極めたものである。

一日、明治天皇は濱離宮に將軍を召されて、三條太政大臣、岩倉右大臣、その他各參議陪席の上、午餐を賜つた。午餐の後、明治天皇は色々と政治上のことに就て、グラント將軍に御下問になつた。

その時、グランド將軍は、

「承るところに依れば、日本にも國會開設の議論がある由、いづれ憲法を御制定になることゝ存じますが、何事も忌憚なく言上せよとの御沙汰であるから申し上げますが、日本の憲法は日本の歴史及習慣を基として御起草あそばさるゝことこそ、最も願はしく存じます」

と言上し、これはよほど、　明治天皇の御思召に適つたと拜察する。

（日本の國情に最も適した憲法）

恐らく當時の具眼者が最も待望したものは、正にこの「日本の憲法」だつたのである。人民の權利ばかり徒らに強く、民權を強調する矯激なる一部民間人の主張する、英佛流の憲法政治は、日本の國情とはどうしても背馳せざるを得ないとは、當時の識者の等しく信じて疑はざるところであつた。

伊藤博文が、率先して、憲法の調査、起草のことに當つたのも、一にこの「日本の憲法」の

必要を、誰よりも強く痛感したからである。

もつとも、伊藤らしい、目先きの利く、功名心も多分に手傳つてはゐたが。

明治十五年三月、伊藤は憲法調査のため、横濱を出發して、伯林へ向つた。當時の獨逸は、佛蘭西に勝つて、獨逸帝國を建設し、名宰相ビスマルクが、ウイルヘルム一世を輔佐して、國威一世を風靡してゐた時代で、君權の旺盛と、新たなる憲法論の研究の發達は、わが國としても學ぶこと多大なるものがあつたわけである。

伊藤は主として獨逸の憲法學者グナイストと墺國のシュタインに就いて學び、その他、佛蘭西、英吉利などを歴訪して、その旅嚢に各國の憲政資料を一杯に詰めて、翌十六年八月に歸朝した。

それから、伊藤は色々と國内的な準備にかゝり、本當に憲法の起草にとりかゝつたのは、明治十九年からであつた。

伊藤の下には、當時の俊秀が網羅され、井上毅、金子堅太郎、伊東巳代治三氏が專ら起草のことに當つた。

この起草については、伊藤などの各委員は、眞劍に事にあたり、深夜を過ぎるまで、議論しつゞけることは、珍らしくなかつたといはれる。

井上毅、金子堅太郎など、少壯意氣にまかせ、しば〳〵伊藤と議論鬪爭をする。自說を主張してやまぬ伊藤は、よほど癪に觸つたとみえ、

「君達のやうな幼弱なものに、何が分るものか」

これを聞いて、負けてゐない。

「なるほど、閣下と較ぶれば、われ〳〵は幼弱でありませう。しかし、閣下はわれ〳〵と同じ年頃には、參議であられた。幼弱な年齡で參議におなりになつたのではありませんか。また、閣下は初めから何と仰つしやつた。今回憲法を起草するに當つては、吾輩と君達三人は、皆各自憲法學者を以て任ずべきである。決して伊藤を長官だと思つて、一歩でも讓る所があつてはならぬ。我輩の議論にしてもし非なるところがあれば、憚るところがあつてはならぬと言はれた。それ故われ〳〵も遠慮なく自己の意見を述べたゞけであるのに、それが思召に適はぬからといつて、幼弱呼ばはりされる」

と言つて、井上などさつさと鞄を持つて歸つた。

その位、伊藤をはじめ、各員は熱心に討議し、眞劍に起草したのである。

起草について、伊藤が最も意を注いだのは、勿論、如何にして日本的な特徵、即ち國體の尊嚴を盛りこむかであつた。

元來、憲法は歐洲に發達したもので、民主的色彩の強いものである。英國などでは、國王を刑戮までして、これを護つたほどである。

この憲法を日本に適用するについて、伊藤は純然たる君主的な憲法を目指して、その渾身の力を傾けたわけである。

また伊藤は、その歐米に於ける實地視察に鑑みて、憲法はその條文がどんなに完備してゐても、國民の精神に欠陷があると、どうしても圓滑に運營されぬと看破した。歐米で、立憲政治がうまくいつてゐるのは、キリスト教の精神が國民に浸潤してゐて、國民思想の根底をなしてゐるからだと考へた。

我が國では、佛教も神道も、儒教も、まだ國民精神の全部ではない。それでは、日本の國民精神の根底には何があるか。即ち皇室尊崇に基く強い忠君思想がこれである。これこそ、眞に日本國民精神として、憲法の根本精神とすべきである。日本の憲法は、これを根底として、制定運用せねばならぬと、この信念の上に立つて、伊藤はその憲法起草の業を進めたのであつた。

明治廿一年四月、憲法草案は、陛下の前に奉呈された。　明治天皇は、この憲法稿本を御嘉納あそばされると、新たに樞密院を設けられ、こゝに國家の元勳と練達の士とを集めて會議を

開催され、この憲法案を追條的に御諮詢、その審議を聞召された。

この樞密院本會議は五月八日からはじまつて、十二月末までかゝり、更に翌二十二年一月までかゝつて終了した。

この間に於ける　明治天皇の御精勵はかしこき極みで、一日と雖も臨御を欠きたまふたことはなかつた。御手許に參る草案は、原文、修正ともに詳細に御檢討あそばされ、少しでも御不審の點があれば、直ちに伊藤を召されて、疑義の氷解せざるまでは、決して止めたまふことなく、その御熱心のほどは、たゞ恐懼するばかりである。

十一月十二日、憲法會議が行はれてゐる時、侍從の一人が慌しく會議室に入つて來て、何事か伊藤議長に耳打ちした。

何事を聞いたのか、無論だれにも分らない。すると伊藤議長は直ちに立つて、御側に進み、何事か言上した。

そしてまた元の席へかへつて、會議を聽いてゐたが、やがてその討議が終り決を採るや否や、再び伊藤議長は起つて、　陛下の御側に進んで何事か言上、　陛下には直ちに入御あらせられた。

入御の後、伊藤は謹嚴な態度を以て起立し、宣告して曰く。

「實は先刻侍從が來て、只今、皇子昭宮薨去あらせられたから、上奏ありたしと言ふから、私はその事を上奏し、昭宮薨去と承る以上は、御上には入御あそばされ、會議はこれにて中止致しませうかと申し上げたところが、　陛下には、會議は中止するに及ばぬ、このまゝ繼續して審議中の一條の終つた後、內儀にかへるから、それ迄は議事を續けよと仰せられたにより、只今まで議事を續け、その一條を議了したから、茲に會を閉ぢ、　陛下には入御あそばされたのである」

と。その時列席の者たち、皆頭を上げることが出來ず、唯恐懼し奉つたとは、當日列席した金子堅太郎伯の回想錄にある。

かうして、わが不磨の大典、帝國憲法は、　明治天皇の厚き御思召、及び伊藤以下不休の努力によつて、完成し、欽定せられて、明治廿二年二月十一日、紀元の佳節を期して、全國に發布されたのである。

この日、帝都には降雪霏々たり、白銀の世界の中に、國民の歡聲は各所に擧つた。

一般市民たちは「今日は憲法樣のお祭りだ」と言ひ、または「絹布（憲法）の法被（發布）を下さる」といつて喜んだといふ。

東京日日新聞は、この日社說で、

「あゝ思へば明治の人民は、如何なる幸福の民ぞ、實に不世出の聖主を上にいたゞき、二千五百有餘年來、わが祖先が未だ曾て得る能はざりし大權を附與せられ、わが祖先が未だ曾て夢みざりし幸福を得んとす、實に千載の一遇かな」

と言つて、歡喜に滿ちた、一篇の明治頌を誌してゐる。

政黨は既に自由黨も改進黨も結成せられてゐるし、待望の憲法も發布されたのだから、こゝにいよ〳〵國會開設といふことになり、總選擧が行はれることになつた、

明治二十三年七月、第一回總選擧が行はれた。實にわが國空前の事實であつた。

議員定員三百名に對して、立候補した者が一千二百四十三名の多きに達し、選擧資格者四十五萬三百六十五人と云はれる。感慨無量なるものがあるではないか。

近頃になつて、憲政政治に對する、とかくの批判を聞く。しかし、現代日本の國民が、われわれの生活を、憲法によつて保障されてゐることは、もう一歩高い位置から、泌々と考ふべきではなからうか。われ〳〵は憲法により、身體及生活行動の安全が保證され、または議會にわれ〳〵の代表を選擧するの權能を與へられ、近代國民としての生活を營んでゐるのである。

今日われ〳〵が、とかく何でもないことゝして看過しがちなこれらの事實が、實に「二千五百年來、わが祖先が未だ曾て得る能はざりし大權を附與せられ、わが祖先が未だ曾て夢みざりし幸福を得んとす」と頌せられた、大きな權利であり、同時に義務であることを忘れてはならない。憲政の實際に就ては、いろ〳〵と議論はあらうが、その根本の精神については、われわれが徒らなる時代逆行を望まない限り、國民の一人々々が、しつかりと胸に堅持してゐてもらひたいと思ふ。

日清日露戰爭時代

日清戰爭

地圖の上で明かなやうに、朝鮮半島の位置は、日本列島の腰に擬されたメスのやうな形をなしてゐる。もしこの朝鮮に第三國の勢力が伸びた場合、このメスは恐るべき利刄となつて、日本の生存權を脅威してやまない。

實に日本の、對朝鮮策は、この自衛權、本能的な生存權に根ざしたものであつて、このために、日清戰爭が戰はれ、日露戰爭が戰はれ、常にわれ〳〵同胞の鮮血を流して、この安定感確保を目ざして、明治史後期の苦鬪が行はれたのである。

日清戰爭は、この半島に手をのばした清國擊攘のため起つたものであり、同時に、當時に於ける日本の地位を確立した戰爭なら、日露戰爭は、滿洲を通じて半島に漸く浸潤せんとするロシアの勢力を、一掃せんがために行はれた戰爭であつて、ロシアの極東政策打破は、同時に、

日本の世界的位置の確立を意味してゐる。

實に十年を措かずに勃發してゐる此の二大戰役は、當時に於ては日本始まつて以來の戰爭であつたが、猛烈な膨脹力と、力强い發展力を持つた日本民族が、思ひ切つてわが島國からとび出して、大陸にその威信を問はんとする、大壯擧だつたのである。

立憲政治が施かれ、統一近代日本の建設が大いに成らんとした時に當つて、突如として起つたのが日清戰爭である。

維新以來、わが政治家が採つて來た、資本主義、殖產興業に依る富國强兵、また民意に基き、大いに國民戰爭をなし得る一つの資格とも云ふべき立憲政治、この二つの實際上の成績を試みんとするものが、日清戰爭だつたのである。

清國には憲法もないし、また西洋文明を採り入れて近代國家化せんとする努力も尠い。古き國と新興國家、保守的なものと、進步的なものゝ間に於ける戰爭。この結果は、自から明かではないか。或る外國人の評によれば、(眠れる獅子は、遂に眠れる豚でしかなかつた)のである。

自由民權論勃發以來、わが官民朝野の感情的な對立甚しく、殊に議會開設以後は、この傾向が特にはげしく、清國公使のごときは、日本は內爭が激甚で、とても外戰は出來ないと見縊つ

たくらゐである。

然るに、一度、朝鮮問題が起るや、國民は齊しく起つて、外敵に當らんとする概を示し、その愛國熱の高調は、その比を見ないくらゐであつた。

畏くも、明治天皇が大纛を廣島に進め、出征兵士と艱苦を分ち賜ふや、一君萬民のわが國體が如實に實現し、今や藩閥なく、政黨なく、官もなく、民もない。全國民が悉く一體となつてこの外戰に當らうとした。

その好例は、廣島に開かれた臨時議會だと思ふ。二十七年十月、廣島に開かれた臨時議會は僅々五分間で、臨時軍事費一億五千萬圓を可決した。一億五千萬圓は、當時に於ては、二ヶ年分の歳出に當るわけである。

この事實は、日本の國民を驚かしたばかりでなく、清國を驚かし、世界を驚かしたのである。日本國民は平日如何に爭ふとも、一旦國難に際しては、一切を忘れて義勇公に奉ずる國民である。日本國民は、世界に於て、最高度の愛國心を有つ國民であることを、世界に知らしめたのである。このことは、たゞ立憲政治が布かれ、西歐文明をよく採り入れ、富國强兵策を計つてゐたこと以上に、われ〳〵は評價もし、誇つてよいことだと思ふ。

小泉八雲は、當時の熊本の市民たちに就て語り、日本人の擧國的な愛國心を極めて淡々たる

筆致で描いてゐる。

「公衆の靜肅さは、特に日本的であつた。民衆は個人のやうに、感動すればする程、外見はますく自制的になるのである。天皇は在鮮の兵士に酒肴と、慈父の如き愛憐の詔書を下賜された。國民も之に倣つて、便船毎に酒、食糧、果物、菓子その他の寄贈品を送りつゝある。高價の寄贈にたへぬ貧困の者は、草鞋を贈りつゝある。全國民は軍事資金に獻金しつゝある。熊本は決して富める市ではないが、尙ほ貧富とも全力をつくして、その忠誠の念を表はさうとしてゐる。子供すら獻金した。又豫備兵の家族のために、特別の寄附金募集が町々で企てられた。——豫備兵たちは既に結婚して、大部分は低い職業に從事してゐるのだが、突然召集されて、妻子たちは糊口の途を失ふたから、それを助けてやらうと、市民が自發的に嚴然と誓つて努力しつゝあるのである。こんな非利己的な同胞の愛を背後に有する兵士が、兵士としての義務を十二分に盡すべきは、疑ひの餘地はない。そして彼等は、盡したのであつた」

愛國熱の高潮と共に、見遁じてならないのは、政戰兩略の上からみて、戰爭指導が極めてうまくいつたことである。卽ち文武の統一調和が圓滑に進み、よく戰爭目的の完遂に努めたことである。

明治天皇の聖慮は申すも畏れ多い限りであるが、內閣總理大臣伊藤博文と、軍部の大立者山

縣有明が、よく謙抑その分に應じ、軍事外交の一元化に全力をつくしたのであつた。

戰略から言つても、わが陸軍は必勝の信念に燃えてゐたのである。當時陸軍は、積極的に獨逸の近代兵學を攝取し、六ヶ師團の軍容は當時としては、近代化された軍隊だつたのである。

開戰前に、參謀次長川上操六は、清國を巡遊視察して、その所感を傍人に、

「清兵鎧袖一觸のみ。支那の交通は、陸運も水運もなつてをらん。あの廣大な地域に、どうして大軍を自由に動かすことが出來るものか」

と語つてゐる。一戰必勝の自信が見えてゐる。

二十三年には、わが陸軍は第一回特別大演習をやり、動員から解除まで、全く實戰通りにやつて、複雜な近代戰鬪の運用をマスターしてゐるのである。特に兵站線の研究は、全く大陸に兵を動かすに充分なほど、進んでゐたのである。

海軍は之に對して、その艦船兵器の上では、まだそれ程完備してゐたとは云へまい。日本軍が大擧して京津近くに敵前上陸をして、一擧首都北京を衝くといふ川上操六の放膽な作戰が敢行されず、まづ朝鮮半島に兵を進め、逐次進んで行くといふ地味な作戰になつたのは、わが海軍の兵力が、必ずしも清國の北洋水師に優越してゐなかつたからだと云はれる。

北洋水師の定遠、鎮遠は、清國が買ひたての甲鐵艦であつて、この裝甲を貫き得る日本艦隊

の大砲は、僅かなものであつた。黃海海戰で、わが砲百五門の中、僅かに三門しかなかつたのである。然るにこの海戰でわが軍が一艦も失ふことなく、敵の五艦を擊沈出來たのは、日本軍艦は小さいけれども、スピードがあり、更にわが海軍將士が實戰的によく精到なる訓練をつんでゐたからである。

開戰と共に、わが第一軍は山縣有朋指揮下に朝鮮半島に上陸し、平壤に於てまづ清軍を大いに敗り、北上して鴨綠江を渡り、また第二軍は大山巖大將が指揮官として、黃海を橫斷して、大連近くに上陸、遼東半島を席捲し、同じく北上して、蓋平に於て、第一軍と連絡してゐる。黃海海戰に大勝したわが海軍は、威海衞を强襲し、また劉公島を夜襲して、遂に定遠以下數艦を擊沈し、敵の提督丁汝昌は遂に降伏して自殺し、北洋水師は全く潰滅したのである。

こゝに於て、わが軍は兵を合して、營口を占領し、田庄臺を平げ、更に敵の心腹京津地方を衝かんとする態勢を示した。

清國はこゝに於て、全く戰意を失ひ、總理大臣兼直隸總督李鴻章を全權として、馬關に來つて、和を請はしめた。これが下關談判で、外相陸奥宗光の奮鬪で、和議が成立した。

こゝまでは、極めて圓滑に、わが希望は達れせらたが、突如として、三國干涉のことあつて、遂にわが國は遼東半島の領有を放棄せざるを得なくなつたのである。軍需品は消耗し、兵員は

損傷し、疲勞してゐる。こゝに新たに露獨佛の極東艦隊と、露國の極東陸軍と一戰を交へることは出來ない。わが國民は、上下共に、全く男泣きに泣いて、この要求に屈し、臥薪嘗膽を誓ふ外はなかつた。

日清戰爭は三國干涉によつて、千仞の功を一簣に欠き、東洋問題の解決を徹底せず、後年日露戰爭の禍根を蒔いたが、日本の輝かしき戰勝は、全世界を聳動し、東亞の政局に、日本はどつしりと座を構へることになつたのである。

三國干涉のことは、全く譬へやうもない苦杯であつたが、外交的によい經驗を積んだ日本は、來るべき日露戰爭のためには、悉ゆる外交的手段を考へることになり、日英同盟締結、また米國との親善關係樹立などによつて、露西亞をたゝきつけるために、巧妙なる外交環境をつくるのに成功してゐるのである。この意味で、得がたき教訓を學び得たといふべきであらう。

また、馬關條約による臺灣の領有は、種々の意味で、今日のわれ〳〵にとつて、大なる恩惠を與へてゐるわけである。支那事變になつても、われ〳〵が比較的に砂糖に不自由しないことなど、日清戰爭の戰爭指導者の先見の明に、われ〳〵は、もつと感謝してよいはずである。

とにかく、戰後日本の發展は目覺しいものがあつた。日本が本當の產業革命に入つたのは、これからである。

支那からの賠償金二億兩を基礎にして、斷然金本位制を採用したものも、その一例である。商業の發達も素晴らしい。明治廿七年に三億二千三百萬圓であつた會社拂込資本は、三十一年には、二倍の六億二千萬圓に飛躍してゐるのをみても分らう。

しかし日本の工業はまだ幼稚極まるものであつて、この確立には、尙十年、卽ち日露戰爭を待たなければならなかつたことは、注意してよいことだらう。

日露戰爭

條約改正に一部成功し、また清國といふ大障碍物を蹴飛ばして、發展の一路を辿つた日本は、その宿命とも云ふべき露帝の帝國といふ大鐵壁に擊突せねばならなかつた。

露國の東方侵略は、その由來は古い。日本は幕末以來、北邊にその脅威を感じてゐるのである。このまゝ露國のなすがまゝに委せておけば、日本は、結局その併呑に甘んじなくてはならぬとは、當時の先覺者たちの一致した考へであつた。

或る者は坐して國家の滅亡を待たんより、進んで彼に對抗する地位を築くべしといふ積極論をとり、或る者は、その抗爭を避けて、退いて他日に期すべしといふ消極論を說いた。

對露積極論者は、吉田松陰、橋本左內、西鄕隆盛などで、松陰などは、安政年間、野山獄に

在つて書いた幽囚錄には、

「善く國を保つものは、先づ進取せねばならぬ。列國の來侵にまかせ、群夷爭來の中に坐して爲すことなくんば、國家は滅亡する」

と書いて、進んで朝鮮をわが勢力範圍に收める必要を說いてゐる。

一方、消極論者は、……非征韓論者などは皆それだが、明治六年、時の北海道開拓使長官、黑田淸隆は、樺太放棄の建議を奉り、

「力を無用の地に用ひ、他日に益なきは、寧ろこれを顧みざる者に若かず。故に之を棄ろを上策とす」

と論じて、樺太を放棄し、露國との無用の係爭を避けたいと、その趣旨を述べてゐる。

進んで取るべしと云ふのも、退いて守るべしといふのも、いづれも露國の東方侵略政策に對する、恐怖の念から出發したものであつた。

併し、對露關係に於ては、幕末から明治初期にかけて、日本は天佑ともいへる幸運に惠まれてゐる。それは、露國の不凍港を得んとする鋭鋒が、主としてバルカン、中央亞細亞、印度方面へ向けられてゐたことで、露國は到る所で英國と激しい鬪爭を捲き起してゐる。クリミア戰爭、露土戰爭など、みなそれである。その爲に、極東方面には、手を出す餘力がなかつたので

ある。若し手をのばしたら、維新草創期の日本は、到底日露戰爭をやる程の實力はない。滿洲は勿論、朝鮮、最惡の場合は北海道なども、その脅威を免れなかつたであらう。

英國勢力との激鬪の不利を覺つたロシアが、再び極東方面に目を向けた時、極東方面の情勢は昔日とは全く趣を異にしてゐた。往年の未開國日本は、着々と近代的體制を整へ、淸國を一擊の下に屈してゐたのである。驚いた露西亞は、三國干涉の首謀となり、日本の遼東半島獲得を放棄させ、かねて淸國に恩を賣つて、更に大きな報酬を得ようとしたのである。その報酬は明治廿九年の露淸密約がそれであり、旅順、大連の占領、滿洲の國事的占領がその露骨な現れであつた。その後、朝鮮にも親露派が擡頭してゐる。

日本として、これは到底默視することの出來ぬ事態であつた。

それに對して、日本が外交的に打つた一手が、明治三十五年の日英同盟で、日本は英國の極東權益の番犬の役目を引きうけたと云はれたが、これは露國をして一時、その露骨な侵略政策を反省せしめてゐるのである。滿洲撤兵條約がそれで、逐次露國は滿洲から撤兵することになつたが、折柄露國宮廷內に於ける主戰派の擡頭は、全く極東の平和を絕望の深淵へ投げ込んでしまつた。

明治卅七年一月末、最早猶予されないといふ一大警報が、わが參謀本部に入つた。それは露

國參謀總長及び陸軍大臣は、その作戰計畫を立案し、極東總督は開戰を決意してゐるが、それには紅海に在る增援艦隊の東洋來援を待ち、シベリア第三軍團の編成を終り、旅順のドックが竣工するまで、戰爭を遷延してゐるに過ぎないといふ牒報であつた。

果然二月一日、參謀總長大山巖は、急遽參內し、明治天皇に重大なる伏奏をした。今や彼に先んじて、之を制するに若かずと、詳かに奏聞し奉つてゐる。

次いで、二月三日、更に重大な牒報がとゞいた。露國の旅順艦隊は出動し、その行先き不明であると。

こゝに於て、桂首相は、二月四日午后、御前會議を奏請することになつた。勿論、會議に於ては一人の異論もなく、開戰と決定した。八日には旅順に於て、わが海軍は第一戰の火蓋を切つた。十日を以て、漸く宣戰の詔勅が渙發された。

戰爭の當初に於ては、わが作戰當局をはじめ、大臣元老の何人と雖も、この勝算に確信を持つてゐたものはなかつた。勝敗は問はず、國家自衛のため、最後まで戰はんとする强い決心だけであつた。

時の參謀次長、兒玉源太郎は、四分六分に戰ふ。六遍勝つて、四遍負ける、そのうちには誰か調停者が出るだらう、と云つてゐる。

また海軍大臣、山本權兵衛は、

「先づ日本の軍艦を半分沈め、人も半分は殺す。その代り、殘りの半分で、ロシアの全艦隊を全滅させてやる」

と言つてゐるが、何人も必勝の確信はなかつたのである。

それは、露國の持つてゐる艦隊が、歐亞を合せて日本のそれより遙かに多く、また陸軍の兵力も、……その極東に於ける兵數だけでも、日本に優つてゐたからである。

樞密院議長伊藤博文は、外債募集のため米國へ渡らんとする金子堅太郎伯に對して、かう云つて激勵してゐる。

「今度の戰爭では、陸軍も海軍も、大藏も、日本が確實に勝つといふ見込みを立てゝゐる者は一人も居ない。この戰ひを決するまで、私は陸海軍の當局者に聞いてみても、確信のある者はなかつた。

しかしこのまゝ打捨てゝ置けば、露國はどし〳〵滿洲を占領し、朝鮮に侵入し、遂にはわが國家まで脅迫するだらう。事茲に至つては、國を賭して戰ふの一途あるのみだ。成功不成功など眼中にない。

かくいふ伊藤博文のごとき、榮位、顯爵、生命、財產は皆　陛下の賜物である。今日は國運

を賭して戰ふの秋であるから、わが生命、財産、顯榮、榮位悉く、陛下に捧げて御奉公する積りだ。故に貴君も博文と共に手を握つてこの難局に當つてくれ。

かく言ふ伊藤は、もしも滿洲にあるわが陸軍が破れ、海軍が對島海峽で悉く打沈められ、露國が海陸からわが國に迫つた時には、身を士卒に伍して鐵砲を擔いで、山陰道から九州海岸に於て、博文の命のあらん限り露軍を防ぎ、敵兵をして一歩たりとも、わが國土を踏ませぬといふ決心をしてゐる。

元寇の昔、北條時宗は身を卒伍に落して敵と戰ひ、その妻には共に九州に至り、弱を焚いて兵士を犒へと命じたと聞くが、自分も萬一の時は、妻にはかく命ずる積りだ。自分はこの決心だ。貴君もそのつもりで、成功不成功を眼中に置かず、國家のためこの大任を果してもらひたい」

と聲涙共に下るものがあつたといふ。以て當時の政治家の殉國の決意が、窺ひ知れよう。たゞ政治家ばかりか、軍人も一般國民も、本當に國を賭して、この大國難に當らうといふ意氣に燃えてゐたのである。死中に活を得るといふ決心だつたのである。

この間に於て、日本側の戰略上、有利とすべきは、敵東洋艦隊が、旅順、浦鹽と二分されてゐることと、陸軍の輸送が、單線であるシベリヤ鐵道たゞ一本だといふことであつた。そこ

で、日本艦隊は、兵力を集中して、敵艦隊を各個擊破すること、陸軍も迅速に兵力を集中して、同じく各個に捕捉殲滅するといふ點に、作戰當局の苦心があつた。要は、總て兵力の轉移を迅速に、といふのが、作戰的な勝敗の分岐點であつた。

海軍はこの點に於て、大體うまくやり、遂には、バルチック艦隊の擊滅といふ大ヒットを放つてゐるが、要するに日本海、朝鮮海峽にわたり、ホームグランドの上でやるのであるから、行動は比較的自由自在だつたのである。

これに對して、陸軍の苦心は容易ならざるものがあつた。露西亞はシベリヤ鐵道一本で、兵力輸送には大いに困難を感じたが、わが軍も陸運水運共に、完全とはいへなかつた。即ち陸軍御用船は、僅かに三四十萬噸で、これを同時に使用することが出來ず、鐵道も幹線は、一日十四列車運轉が、最高能率と云つた工合である。

しかし、これらの不利は、專ら軍の士氣の旺盛さと、三國干渉以來臥薪嘗膽の國民の愛國的熱情を以て補ひ、わが軍は怒濤のやうに、大陸に向つて押し寄せて行つたのである。

陸軍大將黑木爲禎を軍司令官とする第一軍は、鎭南浦に上陸して、朝鮮の露軍勢力を一掃し、陸軍大將奥保鞏の指揮する第二軍は鹽大灣に上陸して、金州半島を席捲して、旅順の敵を、孤立せしめてゐる。

八月初旬、參謀總長大山大將が滿洲軍總司令官に新補せられ、次長兒玉源太郎は總參謀長に補され、こゝに於てわが滿洲軍は水も洩さぬ作戰の下に、漸次北上し、遂に遼陽を屠つてゐる。

一方乃木大將を指揮官とする、わが新編の第三軍は、敵の堅壘旅順を猛攻して、死傷數萬を出して、漸くこれを陷れ、急遽北上した。こゝに滿洲軍は全兵力足並みを揃へ、奉天包圍戰を敢行して、空前の大勝を收め、敵の戰意を全く挫折せしめ、戰勝媾和の因をつくつたのである。

奉天戰、日本海海戰で戰局は殆んど決定し、歐米方面に於て媾和の議が起つた。露軍は敗れたりと雖も、ハルビンには四十七萬七千の大軍と、千五百六十門の大砲を持つてゐた。これがポーツマス談判に於ける、露國側の强味であつた。全權ウィッテは、(露國は戰敗國ではない、その領土は完全に保有され、陸軍の戰鬪力は未だ破壞されてゐない)と豪語するのであつた。

かうして和議は、容易に成立しなかつたが、談判十回にして、九月五日に媾和談判が成立した。

その結果が、必ずしも國民の期待してゐた通でなかつたことは、衆知のとほりである。しかし、露國はこゝに於て、全く滿洲から手を引いて、その本土シベリヤにかへり、その積極的な東方政策は、全く破碎されてしまつたのである。

日本にすれば、滿洲を救ひ、清國の獨立を保全し、朝鮮の歸趨を明かにして、その宗主權を得たことは、大成功であり、一に大陸に鮮血を流した同胞のおかげである。

明治四十三年には、日韓併合が行はれ、日韓兩民族が、こゝに手を提へて、東亞新秩序への第一歩を踏み出したことは、今度の支那事變に於ける半島同胞の活躍を觀る者にとつて、感慨深いものがある。この意味で、日露戰爭の結果なり、意義といふものは、われ〳〵にとつて、今にして更に大きく評價されなくてはならぬと思ふ。

戰勝日本に對する世界の驚異は、戰後になつて更に彼等の友好的な外交態度となつて現はれてきてゐる。歐米列國は競つて、日本駐劄の公使を昇格せしめて、大使としてゐる。わが國は、こゝに於て完全に世界の八大强國の一に列し、單に戰爭が强いといふばかりでなく、戰後の日本の發達は、文化に於て、經濟に於て、漸く世界の注目するところとなつたのである。世界に於ける日本帝國の地位の確立、それこそ日露戰爭の大きな收穫だつたのである。

明治天皇と日露戰爭

明治天皇の當時の御製に

たゝかひの上に心を盡しつゝ

年のふたとせ過しけるかな

まことに此の二ヶ年の、　明治天皇の御生活の御様子は、拜察するだに畏れ多い極みであつた。

天皇は出征兵士の艱苦を偲ばせられ、冬期には御座所のストーブを焚くことを止め、小さき御手あぶりを御用ひあそばされるのみであつた。しかも夏期には、炎熱の盛夏にも、舊式の御軍服を御召しあそばされ、毎日表御座所に出御遊ばされた。この御軍服は、冬夏ともお變りがないので、暑熱きびしき折には、御汗がシャツとワイシャツとを浸透し、御上衣にまでにぢみ出るのも、畏れ多い極みであつた。

暑しともいはれざりけり戰の
場にあけくれたつ人思へば

戰時中の御日常を拜すると、その御繁劇は甚しいもので、午前といはず、午后といはず、各大臣や參謀總長、軍令部長などが引つきりなしに御拜謁を願ひ出て、政務を奏上する。

更に定例及び臨時の大本營會議、內閣の御前會議や、樞密院會議が開かれる。隨つて朝の出御の御時間は一定してゐても、夕の入御時間は定まらず、夜分は九時過ぎまで、入御の御暇がないのが常であつたと承る。

日曜も祭日もなく、御精勵あそばされたのである。側近の者も、うす暗き表御座所の灯の下で、御側目もふらず、兀々と書類を閲したまふ御有樣を拜しては、感涙に咽ばない者はなかつた。

また、　天皇の最も案じたまふことは、戰況と出征將卒の勞苦であつた。

わがこゝろ千里の道をいつ越えて
軍の場をゆめにみつらむ

當時の侍從武官長、岡澤精大將の謹話によると、戰時中、御寢は夜の十二時前後なので、夜半に來る電報は大抵朝を待つて奏上することゝしてあつた。

ところが、戰況の報告は何時でも構はぬから奏上するように、との御沙汰があつた。そこで、ひそかに御樣子を承ると、大激戰のある前後は、御寢所に入りたまふても、おち〳〵御寢あそばされぬといふことが分つたので、御沙汰のとほり、畏れ多いが、夜半でも早曉でも、電報の到着次第、直ちに奏上することにしたといふ。

日露戰爭といふ、古今未曾有の大事に際して、如何に御軫念あらせられたか、また如何に御精勵あそばされたか、たゞ拜察するだに恐懼に堪へないものがある。

戰爭は足かけ二ヶ年であつたが、思へばまことに長い〳〵年であつた。

さま〳〵にもの思ひこしふたとせは
　あまたの年を經しこゝちする

かうして、此の二ヶ年間を經過したまふた、　天皇の御姿は、痛ましくも變らせられたのである。戰前まで漆黑であつた御髮は、戰後殆んど半白とならせられた。

恐れ多くも、六年後の御大患は、この戰爭中の御過勞に歸因するとは、侍醫をはじめ、側近奉仕者の悉く一致した意見であるといふ。

空前の大快勝の裏にひそむ、この事實を、われ〳〵は今、頭を垂れて、想ひみるべきである。輝かしき明治と、われ〳〵が今日享有する幸慶を想ふにつけ、われ〳〵は更に深く頭を垂れて三思すべきである。

二千六百年私感

大和民族が歴史の上に現はれて、まづ第一に受けた試錬は、　神武天皇の御東征であらうと思ふ。

日向の國を出發されてより、日本書記に云ふ「東に美しき地あり。青山四周せり、彼地必ず以て天業を恢弘し、天下に光宅するに足るべし」と云はれた大和に達するまで、われ〳〵の祖先が受けた苦難に、想像に絶するものがあつたのではなからうか。

神武天皇を中心に、諸皇兄、諸皇子、その外に大和民族は男も女もこの御一行に加はり、文字通り民族を擧げて、九州から大和に進んで行つたのであらう、

御東征の御道筋は、速吸の門を經て、宇佐に立ち寄らされ、今の下關海峽に出て、瀨戸内海を進ませられた。九州山陽の地方は、已に皇化に浴すること深かつたと見えて、天皇の至りますと聞き傳へるや、先を爭つて喜び迎へた。速吸の門（豐豫海峽）では珍彥が迎へに出て、自ら嚮導し奉らんと云つてゐるし、宇佐では菟狹津彥が宮殿までこしらへて、皇軍を饗し奉つて

ゐる。みんなこれらは地方の豪族で、皇師の大義名分を知つて、歡迎し奉つてゐる。

御一行はそれから安藝を經て、吉備の高嶋で留り給ふこと八年、此處を最後の根據地として、舟や兵器食料の準備を整へ、大沼澤地帶の難波へ向はれたのである。この難波から大和橿原に達するまでが、大和民族の惡戰苦鬪時代で、土地の豪族、長髓彥らを對手に、長月日の死鬪を續けられたのである。

皇兄五瀨命は流矢に中らせられて薨去になり、熊野沖では暴風雨に遭遇して、皇兄弟二人は行衞不明になられるといつた悲運にも見舞はれたのである。勿論、御一行に從ひ奉つた、われわれの祖先の大半は戰死し、或ひは行衞不明になつたことだらう。熊野の原始林の中で、火食の術も解しない蠻族と戰ひ、または穴居の徒と格鬪し、親を失ひ、子を失ひ、夫を失ひつゝも、なほも一團となつて、大和の新樂土を指して、進んで行つたのである。

苦しみに逢ふ毎に、

みつ〳〵し久米の子等が、垣本に植ゑし薑、口ひゞく、我は忘れじ、擊ちてしやまむ

と、天皇のお作りになつた來目歌を合唱して、勇氣を鼓舞して、これを征服して行つたのであらう。

橿原宮の御卽位の式には、大伴氏、久米氏、物部氏の祖は矛を執つて儀衞を嚴にし奉り、齋部氏、中臣氏の祖は恭々しく御前に進み出て、祝詞を言上し奉つてゐる。いづれも戰場生殘りの士、歷戰の苦鬪を顏に刻みつけて、この盛儀に列しその感慨は如何ばかりであつたらうか。

日向を進發して二十年、生き殘つた老若男女は幾人だつたらうか。如何なる困苦にも屈せぬ大和民族の精神的な骨骼は、この建國の日すでに立派に出來上つてゐたのである。この御東征に示された個人的な勇氣、そして民族としての强い團結力、しかも宗教的にまで高められた天皇尊崇の信念は、二千六百年を通して、日本の歷史の中核なのである。

勇武を日本民族の第一特質とすれば、外來文化を巧みに吸收して同化する能力を第二の特質といふことが出來よう。

佛教傳來、大化の改新など、みなこの特質をハツキリ示してゐると思ふ。

支那では佛教が印度から輸入されて、これが一般の支那人の生活の中に溶けこむまで二百年かゝつてゐる。日本では、これが輸入されると、間もなく、聖德太子は佛教の註釋書を書かれるし、奈良朝に入ると、諸國に國分寺が建てられ、高僧も輩出するし、佛教は國民生活の隅から隅まで浸みこんでゐる。

また古代以來、血族中心の社會組織を營んでゐたのが、支那の法制思想を受け入れると、一

躍して大化の改新といふ思ひ切つた大改革をやつてのける。律令を輸入し、八省百官の制を定め、當時の東方文明の中心、唐朝の制度を巧みに採用してゐるのである。以て、日本が外來の文明をとり入れるのに、如何に鋭敏であり、奔放であるかは察せられるのである。

しかも甚だ頼もしいことに、此の外來文明の輸入が一段落すると、すぐに民族本來の本能をよび醒まして、この輸入品を國產品につくりかへてしまふのである。

平安朝に入ると、天台でも眞言でも、支那のそれとは別のものとなり、日本的特色を帶び、鎭護國家第一の國家主義の宗教と化してゐる。鎌倉時代以後の佛教など、日蓮宗をはじめ、全く日本の佛教として、生れ更つてゐるのである。

また大化の改新のやうな、支那式な法治思想にしても、日本の國民はいつまでも此の形式的な借着に滿足はしてゐなかつた。藤原時代の藏人所、檢非違使などの役所は、大寶令制にはないし、院政などゝ云ふ政治は、支那式な常識では、到底律しられるものではない。

從つて、法の力でなく、人格の力で主從の關係を結んだ、武士といふ階級が政治的に擡頭して來るのは、自然の勢だと思ふ。

「日本歷史の曲り角には、いつでも支那人が立つてゐた」といふのは、本當だらう。大陸文化を攝取する每に、日本の歷史は一躍進をとげてゐる。しかしわれ〳〵の祖先たちは、何時の間

にか曲り角を曲つて、一本道を着實に歩み通して來たことを忘れてはならないのだ。

神武御東征を、日本民族の第一の試錬と云つたが、元寇はその第二の試錬といふべきだらう。私は蒙古の襲來に對して、當時の日本が、武家政治を確立してゐて、痛烈な反擊を加へ得たことを、一つの天意とみてゐる。日本の國體から見れば、武家政治といふものは、明かに變則だが、鎌倉幕府の成立は、この元寇擊退の一つの神意的な準備だつたと見ればよいのではないかと思ふ。

藤原時代の末に、滿洲族の一派、刀伊人がわが北九州を侵し、狼藉を働いたが、貴族政治の中央政府は、全く爲すところなく、その跳梁に委ねたことがある。

もし元寇が、藤原時代に起つたらどうであらうか。七八十艘でやつて來た刀伊の亂の何百倍の害をなしたであらうし、日本の國は一時危かつたに違ひない。

幸ひに中央には「膽甕の如し」といはれた將軍あり、地方に精强なる鎌倉武士が頑張つてゐた。

當時の武士は、江戸時代のやうに、都會に住む、一種のサラリーマンではない。農村に住んで、百姓をやり、しかも常に武事に勵んで一旦緩急の日に備へてゐるのである。だから幕府か

ら九州出兵の下知狀が下ると、武士たちは進んで難に赴くことを願ひ、全國の寺院は敵國降伏の祈禱に、殷々と、その鐘を鳴りひゞかしたのだ。

元冠に際して、あまり神風のことのみが言はれるのは、どうかと思ふ。彼等は本國から農耕の道具まで持つて來てゐながら、半年も北九州の沿岸をうろ〳〵してゐて、上陸出來なかつたのだ。ぐづついてゐる間に、神風に遇つて覆滅し去つたのだが、この半年も上陸出來ないといふところに、わが九州防衛軍の活躍を想ひみるべきである。河野通有だけが、勇戰したのではない。名もなき、數萬の鎌倉武士が、たゞその武勇の名にかけて、國土防衛のため死鬪したのである。

武家時代は、日本民族のもつ最大の特質である勇武の性を、極度に高め、養つたことに、意義を見出すべきであらう。その武威の發揚が元寇だつた。されば、明治大帝も、北條時宗に從一位を贈らせ給ふてゐる。

建武の中興は、武家政治が日本の國體に合致しないといふことで、一應否定されたことの現はれだと考へられる。

北畠親房が神皇正統記の冒頭に「大日本は神國なり」と喝破してゐるのは、後世歴史の教科

書として讀まれたい爲でなく、實に此の武家政治といふ鐵壁に投げつけられた爆彈なのであつた。當時の政治に對する、優れた革新意見書とみてよいと思ふ。

併し、武家政治は、これから後も長く續いたが、これに對する否定が公式にこの時なされたといふことは、日本の國體を考へる者にとつて、いつでも一つの理想を示すものであつた。

吉野朝から室町時代にかけて、日本民族は再び活潑な膨脹運動を起してゐる。上代に於て、三韓征伐などに現はれてゐるやうな、民族の大陸進出熱が、異狀に勃興してゐるのである。

足利義滿が明に對して卑屈に出たのは、たゞ貿易の利を求めるに汲々としてゐるためであるが、當時の國内の需要を充すには、この勘合貿易だけでは不充分であつた。此の不足を補ふため、また義滿等室町時代の軟弱外交を訂正するため、朝鮮海峽から南支那海にかけて横行したのが、わが八幡船であつたのだ。

倭寇といふ略奪の方面が強く考へられがちであるが、建前としては正常の貿易船であることを、もつと認めるべきであると思ふ。世界中どの國民でも、海外發展の初期は、貿易と武力の二刀使ひである。この頃になつて、支那に對して、倭寇といふ言葉を遠慮するなど意味ないと思ふ。

戰國時代は、恐らく武士としては、最も得意な時代だつたと思ふ。足利時代などでは絶對に見られない、スケールの大きい英雄豪傑を輩出したのをみてもよく分る。

これらの英雄の中で、何といつても出色なのは秀吉で、その天下統一事業といひ、半島出兵の壯擧といひ、生氣溢れる此の時代の風潮をよく現してゐると思ふ。

半島出兵は、朝鮮を討つのが目的ではなく、大明國を征するのが目的であつた。明の太祖朱元璋は、その遺言に、日本を「不征國」の一つに擧げて怖れてゐたが、征伐出來ない國どころか、却つてその國から征伐されるといふ有樣である。

秀吉の朝鮮役は、要するに吉野朝以來、欝然と勃興した日本民族の、第二回目の海外發展熱のクライマックスといふべきで、日本人の武勇を遺憾なく發揮したものと云へよう。

面白いのは、此の朝鮮役で負傷したり、病氣になつて、日本へ歸りそこなつた兵士たちを、朝鮮政府で高給で傭つてゐることだ。日本人の勇敢なことを知つてゐるので、これから後は、內亂があると、敵味方ともこの日本人を招いて先發隊にしてゐるのである。

鎖國の得失を考へる前に、當時の日本人はどの位、海外に發展したかを考へて見るがよい。當時、日本人は盛んに安南、呂宋、暹羅などの南方地方に居留地を作つて、其處を日本町と呼んでゐた。

暹羅などは、寛永の頃には日本居留民八千人と云はれたくらゐである。フイリツピンの呂宋の日本町なども、江戸時代初期には、三千人も日本人が住んで、その風俗を變へないでゐると記錄されてゐる。

これらの南方發展の日本人は、この記錄に殘つてゐない者を數へると、どの位あつたか想像もつかないくらゐである。

それが鎖國令の勵行によつて、日本人の海外渡航はピタリと禁止され、これらの日本人町も日ならずして荒廢してしまつたのである。

日本の國民性の中に、島國根性といふものは、この鎖國以前には、絶對見られなかつたものだ。

鎖國の功罪といふが、蓋し百害ありて、一利なしといつたところだらう。

もし、日本人が鎖國といふ桎梏を受けずに、その本能ともいふべき、天馬空を往くが如き海外發展を續けてゐたならば、日本の版圖といふものは、二、三世紀前に南洋一帶に擴がつてをり、現在われ〳〵は「持てる國」として、もつと、別な活躍をしてゐただらう。

また二世紀も早く、西歐文明の影響を受けて、得意の吸收同化作用を行つたであらうし、外國貿易の盛況は、やがて國內の產業の發達を促して、われ〳〵日本人の人口も、もつと增大し

てゐたか知れない。江戸時代に、日本の總人口が、殆んど增減しなかつた理由は、五十年毎に訪れた大饑饉のためである。もし外國交通がもつと開けてゐたならば、食糧輸入の道も講ぜられて、斯うした悲慘事は豫め豫防出來たのではないかと思ふ。

維新以來の日本は、大きな世界史の潮流の中に流れ込んだと見るべきである。比較的平和な、また多幸だつた民族史を描いてゐた日本は、好むと好まざるとに拘らず、怒濤逆捲く世界史の中へ投げ込まれたのである。

德川幕府の政權の移動についても、われ／＼は當時世界の二大强國、英國とフランスの暗躍を忘れることは出來ない。幕府を後援する佛蘭西と、薩長を後援する英國の對立は、當時世界の各地に見られた現象の一であつた。今後とも、日本の歷史は、ただ日本一國の動きとしては、分らないのである。世界の日本として考へなければ、何一つ、理解出來ないと思ふ。

日淸戰爭は、東亞に於ける日本の地位を確立した戰爭であるし、日露戰爭は世界に於ける日本の國家的地位を確立した戰爭である。

そして、明治史の苦しみなり、焦慮は、この世界史に追ひつかうとする時の、息切れだつたのである。鎖國以來、三百年の長きにわたつて損をしてゐたハンデキャップを、僅か五十年に

してとり返さうと焦つたのである。明治史にみるあらゆる未熟さや拙劣さは、要するに此の焦慮の致すところである。然しながら、伸びんとする民族の逞しさが、此の時期ほど强く發揮された時はないだらう。

昭和六年の滿洲事變は、日本史が、漸く世界史の中で、これをリードしようとし始めたことを意味してゐる。滿洲の一角に上つた現狀打破の叫びは、一波萬波を呼んで、伊太利、獨逸の活躍となり、世界再編成の運動を捲き起してゐるのは衆知の如くである。

今や日本は、曠古の大戰爭である支那事變の眞唯中に立つてゐる。「無賠償、無割讓」といふ、世界の歷史に嘗てない和平條件を正面に立て、東亞新秩序の建設といふ、新しい目標のために、全力を擧げて戰つてゐるのだ。

近衞さんが言つた通り、今次事變は、日本始つて以來の大戰爭である。日淸、日露の二大戰の比ではなく、若し强いて例を求むれば、神武天皇の御東征に比すべきだらう。

果して幾人の日本人が、新らしい東亞の黎明に參ずることが出來るだらうか。犧牲を踏み越え、踏み越え、われ／＼は此の空前の大事變を乘り切らねばならぬ。嘗てわれ／＼の祖先が示したやうな、大勇猛心が、今ほど必要とされてゐる時代は、二千六百年を通じて、絕無なので

ある。

印　　検

昭和十三年三月十二日印發
昭和十三年三月十六日發行
昭和十四年六月十日四版
昭和十五年五月十五日三版
昭和十五年五月十五日二版
昭和十五年七月廿五日九版
昭和十五年八月廿日八版

新日本外史

定價壹圓貳拾錢

著作者　菊池寛

發行者　加藤雄策
東京市小石川區表町一〇九

印刷者　君島潔
東京市小石川區久堅町一〇八

發兌　非凡閣
東京市小石川區表町一〇九
振替東京三六三三九
電話小石川〇二九二

共同印刷株式會社印刷

菊池寛著

現代文章軌範

四六判　箱入美本　三六〇頁
定價壹圓五拾錢　送料十四錢

現代の文章は口語文でなくてはならない。徒に美辭麗句を連ねた古くさい文語體が生きた思想や感情を描寫するに不適當であることは云ふまでもない。本書は明治中期の口語文體創始時代より最近に至る斯道の一流人士の著作中口語文を以て書かれた代表的文章を集め抒情文・叙事文・叙景文・紀行文・隨筆の五部に分ち最も純正な文章道の指標を示したものである。

東京・小石川・表町一〇九番地　非凡閣發行

終